周作人の「糸魚川」

室井雅宏（訳）
細井慎又（解説）

「野を歩む者」昭和八年二月号「身辺雑記」に次のようにある。

支那北平の周作人と云ふ人から『沈鐘』といふ小雑誌の十八号が送って来た。中に「糸魚川」と題する左の如き文章が載ってゐる。筆者は豈明といふ人だ。あまりよく事情に通じてゐるから日本人の変名かもしれない。いづれにしても一寸異様な興味を覚えさせられたので、少々やゝこしいが全文を転載することにした。

以下、室井雅宏氏の和訳。

糸魚川

一昨日、「京報」を読んだが、見出しは日本の大火災であった。それは、二十一日の「新聯電」の記事を引用し、「糸魚川で大火災。横町、田中町、七間町、濱町等要所はみな延焼し、九時半に鎮火を始める。駅舎の焼失により、上下線ともに一時不通となったが、九時十分に運転再開を開始。五百余戸が全焼し、被害は甚大であったが、幸いにも死者は無かった。」と報じていた。

「糸魚川の大火災」、私はこの言葉を眼にした時、まず思ったのは、相馬御風君の安否である。相馬君の文集に収められている一篇の文章によれば、糸魚川は一風変わった場所であり、珍しい糸魚が採れることが地名の由来であるという。また、同地の北は大海、南は重なり合った山々に面し、猫の額ほどの土地が東から西へと開け、一年の三分の一は、大雪、暴風、波浪に襲われることから、火災もまた特に多くかつひどい。一年を通じて平穏無事な時はほとんど無く、したがって人柄もまた誠実であり、人々は住み慣れた土地に愛着を感じて離れ難く、多くの天災すら過去のこととしてしまう。

相馬君の旧家は一九〇九年に焼け、一九一五年に故郷に戻った時には仮の板小屋であった。一九二四年に家を建て直したものの、まる四年も経たない一九二八年夏にまた延焼してしまった。今回また火災があったとすれば、あれからまた四年経っていないのではないだろうか。一九二八年の火災での被害は百数十戸に過ぎないと言うが、今回は五百戸を超えることから、様相が一変したと思わせるものである。

相馬君は、明治大正時代の文学界における重要人物の一人であり、一般には早稲田派と称された。早稲田大学出身の島村抱月、片上天絃、中村星湖等の諸人が文学作品の批評・紹介に努め、その前には坪内逍遥、後には本間久雄もおり、この時期は文学界が特に盛り上がった時期であったと言える。

大正初年、相馬君は忽然と閑居し、旋風を巻き起こすように帰郷した。ある者は、学校の同僚と意見が合わなかったことが原因であると言うが、この種の話は未だ妥当性を欠くもので、相馬君の閑居は、ほとんど心機一転と言って良いほどのもので、ことの詳細を知ったところで何と言うことも無いであろう。相馬君は以前、西洋流の新文学に偏向していたが、後にそれを全て棄てた。彼の新しい方向は、断定するのは難しいものの、彼が尊重している古人の思想から考えれば、社会から自然へと回帰し、東方の伝統に近づいたのだと言える。

相馬君が最も敬服する古人は良寛上人であり、その次は小林一茶である。この二人は近世に生まれ、亡くなって百年経っておらず、しかも、ちょうど相馬君とは同郷の越後人である。一茶（一七六三～一八二七）は、有名な俳人であり、彼の作る俳句は、日本文学の中では独創的なもので、並ぶものが無いと言ってもよい。沼波瓊音（けいおん）は、「彼は詩を作る際に、良い句、ましてや句を作ろうとは思わず、ただ言葉にしたものを俳諧としている。彼は悩みの多い凡夫であるが、阿弥陀仏に帰依し、不幸に遭うことや老い等を非常に嘆きつつも、一面ではそれを楽しむ態度をとっている。」と述べている。晩年に火災に遭い、残った土蔵を住居としたが、この痛ましい時に作った俳句が「焼け土のほかりほかりや蚤さわぐ」である。この他にも、火事の時に彼は傍らで「大蛍ゆらりゆらりと通りけり」と詠んでいる。

良寛（一七五七～一八三一）は、十八世紀末の僧侶であり、したがって彼の行動には中世の高僧の風格があるが、彼には聖（セント）フランシスコと寒山に近いところがあるが、芸術味は更に多い。しかし、彼らの読書人としての時代遅れの弊風と質素の風は少なく、人々に親しみを覚えさせるものである。良寛が平生最も好んだのは、一、子供、二、綉球（赤い絹糸を結んで作った丸い飾り）、三、おはじきである。彼の最も愉快だった生活とは、子供とのまりつき又は貝殻遊び（きさごの殻のおはじき）をすることだった。

ある人は、彼が国上山の五合庵に住んでいた時の様子を「雨天は家に籠り、晴れれば山へ行って薪や食べ物を採り、又はスミレを摘みに行く。ある時には、子供と贅球（不明）や、かくれんぼをして厭きず、日が出れば乞食として町を出て、暮れれば帰って寝る」と書いている。

良寛は歌を詠み、字を書き、相馬君に言わせれば、その書は第一、和歌が第二、漢詩が第三であるという。しかし、翻訳が難しいのでそのまま数首載せてみたい。

一

裙子（くんす）短く褊衫（へんさん）長し、騰騰（とうとう）兀兀（ごつごつ）只麼（しも）
に過ぐ、陌上（はくじょう）の児童（たち）忽ち我を見、